

# 高知県の鳥類

## 【現 状】

高知県ではこれまで 340 種あまりの鳥類が記録されています。鳥類は移動能力が高いため、長距離の渡りをする種類が多いのが特徴です。渡りの特性で鳥類を区分すると、一年中高知県内で生息している種類（留鳥）、春から夏にかけて繁殖し、秋には南方へ渡去する種類（夏鳥）、秋から冬に渡来して、春に北方へ渡去する種類（冬鳥）、渡りの途中で春と秋に立ち寄る種類（旅鳥）、渡りのコースからはずれるなどして偶発的に飛来する種類（迷鳥）に分けられます。高知県内を定常的な生息地とするのは、迷鳥を除いた約 260 種類ということになります。このうち、森林・草原などをおもな生息地とする陸生の鳥類と、河川や海岸などをおもな生息地とする水鳥とほぼ半分ずつとなります。



写真1. ヤイロチョウ（撮影：西村公志）

2002 年に発行された高知県レッドデータブック【動物編】では、高知県に生息する鳥類のうち、絶滅危惧ⅠA類に 14 種、絶滅危惧ⅠB類に 14 種、絶滅危惧Ⅱ類に 20 種、準絶滅危惧に 39 種、情報不足に 11 種があげられています。これらの合計の 98 種のうち、森林性の種が 44 種、湿地性の種が 48 種を占めています。また、限定された環境に生息する種類としては、亜高山帯に生息する種が 9 種、離島に生息する種が 3 種となっています。

## 【変 化】

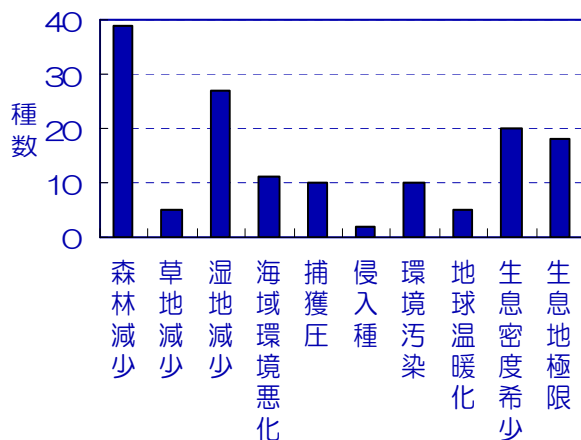


図1. 高知県レッドデータブック掲載種の生息を脅かす要因

高知県は森林率が県土の 84% に上りますが、1950～1970 年代に行われた拡大造林のために、天然林が大きく減少して、現在では県内の森林の大半をスギやヒノキなどの人工林が占めています。その結果、ヤイロチョウやクマタカをはじめ天然林を主要な生息場所とする森林性の鳥類にとって、生息環境が悪化していると考えられています（図 1）。水辺環境についても、開発によって低湿地が減少しているため、湿地性の鳥類にとっても生息場所が縮小しています。湿原やヨシ原をおもな生息地とするヨシゴイやクイナ、干潟に渡来するシギ・チドリ類などがその代表的なものです。

## 【人との関わり】



写真2. スズメ（撮影：山崎浩司）



写真3. ムクドリ（撮影：山崎浩司）



写真4. カワウ（撮影：山崎浩司）



写真5. ヤマドリ（無人撮影）

スズメやカラスをはじめとする人間に身近な鳥は、古くから農作物を食べる害鳥とされてきました。しかし、同時に多くの昆虫を食べるため、害虫が増えるのを抑制しています。また、最近全国的に増加しているカワウは河川で放流したアユを食べるなどの被害を引き起こしています。近年では、ムクドリやサギ類などのように集団でねぐらをつくる性質のある鳥が住宅地に近いところにねぐらをつくと、騒音や悪臭の問題を起こして、嫌われています。

カモ類のうちの一部の種やキジ、ヤマドリなどは狩猟鳥であり、ハンティングの対象となっていますが、最近では狩猟者が減少しているため、捕獲個体数も減る傾向にあります。

一方、もともと日本に生息していなかったのに、人為的に持ち込まれた外来種が野生化しています。アジア大陸原産のソウシチョウは飼鳥として人気の高い種類ですが、近年、高知県東部の山地できわめて高密度で生息するようになってきました。また、中国原産のヒゲガビチョウは2000年頃から高知県西部の山地で野生化し、分布を広げています。これらは本来の生態系を攪乱するため、困った存在です。

佐藤重穂（日本野鳥の会高知）